

第2回

第1章 人間としての生き方・在り方の自覚

青年期の意義とその位置づけ

今回学ぶこと

現代社会とはどのような社会なのだろうか？ また、大人になる前の「思春期」とはどのような時期なのだろうか？ 今回は、現代社会を生きる「わたし」を取りまく現状を自由に着目しながら学んだあと、人間が社会的な存在になる「第二の誕生」の意味について、さらに、大人になるための猶予期間はどのような意義を持つのかについて学習します。



講師

千田有紀

■ ■ 「わたし」 をとりまく現状 ■ ■

フランス革命において、自由・平等・友愛（博愛）が重要なスローガンであったように、「わたし」たちが住んでいる社会において、「自由」は尊重されるべき価値のひとつです。しかし近年、自由は不自由をも、もたらし始めてもいます。さまざまな状況のなかで、限られた選択肢のなかから「自由」におこなう選択は、選択した個人に、その責任を負うことをも要求するからです。したくない選択をも強いられることすらあります。このような社会においては、さまざまな選択の責任を、選択したとみなされる個人が受け入れなければならない、個人の責任とされる「リスクの個人化」が occurs。また社会のなかに居場所を見いだすことができない「社会的排除」の問題もありますが、これはこうした近年の社会状況とは無縁ではありません。

■ ■ 「第二の誕生」の意味 ■ ■

フランスの啓蒙思想家ルソーは、まずこの世に生を受けるのが第一の誕生であり、青年期において性に目覚めていく、その発達段階のことを「第二の誕生」なのだと呼びました。『エミール』においてルソーは、「私たちはいわば、2回この世に生まれる。1回目は存在するために、2回目は生きるために」、「ここで人間はほんとうに人生に生まれてきて、人間的ななにものも彼にとって無縁のものではなくなる。そしてそれこそが、新しい教育を始めないといけない時期なのだ」と書いています。第二の誕生によって人間は、子どもから大人へと生まれ変わると考えたのです。

第二の誕生は、皆さんの身体が早く発育する、発達加速現象によって早まっていると考えられています。と同時に、結婚年齢が遅くなり、大人になるまでの時間は長くなってきています。

■ ■ 大人になるための猶予期間 ■ ■

私たちは子どものうちには、働かずに学校に行って勉強をして過ごしています。また特別な配慮が必要な存在だとも思われています。このように子どもは大人とは全く異なった存在と考えられていますが、このよう事態が生じたのは、遅くとも17世紀のことです。

ドイツの心理学者のレヴィンは大人でも子どもでもない大人でもこの時期の青年のことを、マージナル・マンと呼びました。マージナルとは、境界とか周辺の意味です。

さらに、こうした大人になる前の時期のことを、アメリカの精神分析学者エリクソンは、心理・社会的モラトリアムと呼びました。モラトリアムとは本来は、経済学の言葉であり、支払い猶予や、支払い猶予している期間のことを指します。